

兵庫県のクワガタムシ*

高橋 寿 郎

T. Takahashi; Lucanid-Beetles from Hyōgō Prefecture

本科のものの幼虫は朽木にすみ、成虫は洞穴や皮下・枯木・朽木などにおり、樹液や燈火にもくる。一般に雄の強大な大腮の形状から“くわがたむし”なる名称が冠せられている、比較的大形の種をふくみ全世界から約1,086種知られており(R. Didiér et E. Seguy, 1953)その大部分はインド、マレー諸島、印度支那などの熱帯アジアに分布し、少数のものが欧米その他に分布しているに過ぎない。

日本産は現在4亜科、14属、24種、8亜種が知られているが兵庫県下には3亜科、10属、13種を産する。

本報文を草するに当り貴重な県下産標本をご恵与下さいました高橋匡氏並びに県下産数種の分布状況をご教示頂きました奥谷禎一博士に厚くお礼申上げる。

Family Lucanidae クワガタムシ科

兵庫県産クワガタムシ科の亜科の検索表

- 1 上唇は頭楯よりも突出し、自由に動く……………マダラクワガタ亜科 Aesalinae
- 上唇は頭楯よりも突出せず、上から見えない……………2
- 2 小楯板は小さく細長い三角形で先端は鋭角……………チビクワガタ亜科 Figulinae
- 小楯板は巾広く、先端は鈍角……………クワガタ亜科 Lucaninae

Subfamily Lucaninae クワガタ亜科

現在の日本産は10属、17種、8亜種が記録され日本産クワガタムシ科の7割以上がこの亜科にふくまれている。この亜科の各々の形態では相異が顕著であるが♀の形態を合せ考えると非常にまぎらわしいものがあり

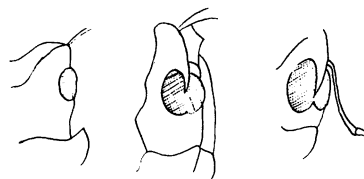
G. J. Arrow氏の研究(1949)では Prismognathus, Psalidoremus, Macrodorcus, Nipponodorcus, Dorcus の5属を別けずに Dorcus 1属と取扱っておられる、但し日本産のものは♀の特長を考慮しても上記の如く一括した取扱いより従来のように別けて考えたほうが良いと思う。

兵庫県には8属11種を産する。

兵庫県産クワガタムシ科の属の検索表

- 1 眼縁突起は眼の外縁の全部を縁どる……………ネプトクワガタ属 Aegus

- 眼縁突起は殆んどないか、眼の外縁の一部または大部分を縁どる……………2
- 2 前胸突起は基節間で中高となり、後方で竜骨状に突出する……………3
- 前胸突起は基節間でおさえられ、後方でもあまり高まらない……………6
- 3 眼縁突起は殆んどなく、体小形、金属色……………ルリクワガタ属 Platycerus
- 眼縁突起はある……………4
- 4 中脛節には3個以上、後脛節には2個以上の外刺がある……………ミヤマクワガタ属 Lucanus
- 中・後脛節には1外刺、まれに2外刺があり、♂の後脛節には外刺のないことがある……………5
- 5 前胸背の側縁は後角の前で彎入し、大腮は♂♀共に先端近くに上方に向く歯をもっている……………オニクワガタ属 Prismognathus
- 前胸背の側縁は後角の前で彎入しない、大腮は♂♀共に先端近くに上に向く歯をもたない……………ノコギリクワガタ属 Prosopocoilus
- 6 前胸背の側縁は後角の前で斜に切れや彎入する……………アカアシクワガタ属 Nipponodorcus
- 前胸背の側縁は後方で斜に切られるが彎入しない……………7
- 7 眼縁突起は眼の外縁の半分を越さない……………コクワガタ属 Macrodorcus
- 眼縁突起は眼の外縁の2/3を越す……………オオクワガタ属 Dorcus



Platycerus delicatulus Lewis, Lucanus maculij, maculatus Mots., Dorcus curvidens hepei (Saunders)

Genus Platycerus Geoffroy ルリクワガタ属

日本産1属1種のみで兵庫県にも産す。

* 兵庫県甲虫相資料、20

1. *Platycerus delicatulus* Lewis ルリクワガタ

Platycerus delicatulus Lewis, Trans. Ent.

Soc. London, p.338, pl. XIV, f. 3 (1883)

♂の背面は藍黒色で光沢があり、腹面は黒色、体の両側はほぼ平行、頭部はやや密に、かつ強く点刻され、頭楯は平滑、複眼前方の突出部は顕著である。大腮は黒色、大歯は頭楯に接近している、前胸背の点刻は頭よりやや弱い、小楯板は平滑、上翅は弱い縦溝を有しその間室は縮皺と小点刻を密布する。脚は黄褐色であるが腿節と脛節との間節部及び前脚脛節は黒色で跗節は全く黒褐色。

♀は色彩の変化があるそうであるが藍黒色で光沢があり前脚は黒色、跗節のみ黄褐色。中・後脚及び跗節は黄褐色。

体長（大腮共）10~13mm

学名の *delicatulus* の如く優美な種で日本全土に分布しているが東北地方を除いては高地帯に分布している、成虫の出現期は地方によって若干異なるが大体6~8月、春にも得られた記録がある。幼虫で第1年は越冬するが、第2年は成虫越冬するようなので春先に得られるのも不思議でない。産卵より羽化まで15か月、成虫が死滅するまで満2か年とのことである。

兵庫県からは氷の山から記録されているのみであるが、宍粟郡音水にも産するとのことを聞いている。

本種の生活史と習性について下山健作氏の立派な報文がある、(Entom. Rev. Japan, VII, 2, pp.10~12, 1952, l. C., VIII, 1, p.27, 1956)

産地；** 宍粟郡音水，養父郡氷の山〔2♂♂，27—V—1953，奥谷，1955〕

分布；日本（北海道，本州，四国，九州）

Genus *Lucanus* Scopoli ミヤマクワガタ属

日本産は3種知られているが本州産は1種のみ。

2. *Lucanus macurlifemoratus* Motschulsky

ミヤマクワガタ

Lucanus hopei Parry var. *macurlifemoratus* Motschulsky, Etud. Ent. p.9 (1861)

Lucanus sericanus Voll., Tijdschr. V. Ent. IV, p.103 (1861)

♂、黒褐色乃至褐色、黄色毛を装い少しく光沢がある。頭楯及び上唇は細い三角形を呈し、垂直に下方を向き、前頭の中央には1個の横隆を具え両側には耳状の大突起がある。大腮は普通頭と前胸背を合せたより長く少し下方に彎曲し末端はほぼ等しく2分し、中間に普通4個の歯を具える。前胸背は頭とほぼ等長、中央には浅い縦溝を装い点刻のある中央部を除き頭と共に皺状に細顆

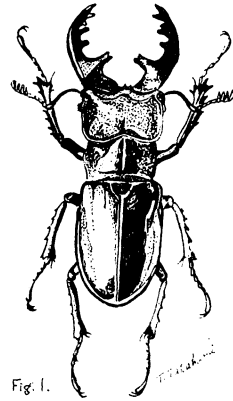


Fig. 1.

Lucanus macurlifemoratus Motschulsky

粒を密布する。上翅は頭部と前胸背を合せたよりも少し長く全面に小点をやや密に布く。脚は黒褐色、腿節の外側に長楕円形の横褐色紋があり、脛跗節はやや淡色。

♀、黒色で光沢があり大腮は短く、頭は小さく癒合した粗い点刻を密に装う。前胸背は上翅より巾狭く点刻され、側方では密、上翅は小点刻をやや密に装う。体下は黄色の短毛を具え、腿節には黄褐色の長紋を有する。

体長（大腮を除く）30~45mm

兵庫県下クワガタムシ科中一番普通に在る種である。クヌギの樹液に集まり樹上にも見られ、ゆすれば容易に落ちてくるし燈火にも飛来するがこの場合♀が多い、7、8月頃が最も多い。

大腮の変化もあり、♂の頭部両側に突き出した耳状部は小形になるとだんだん弱まり殆んど消失するに至り大腮も小さくなる。

本種の山地型は *f. hopei* Parry といい、本州、四国、九州の山地に産するが、低地帯では基本形と一緒にいることがある。この形は♂の大腮の基部の内歯が中央のもの（基部から3番目）よりも太いが長くないので小形の♂でも基本形と区別出来る。エゾミヤマクワガタ subsp. *elegans* Plant は北海道、本州（東北地方）、千島（国後）に産し、♂の大腮基部の内歯は中央の内歯よりも小さく、大腮の先端の叉状部はより広く拡がり、その下方の枝は比較的長く、頭部前縁中央の横長の突起はやや小さく中形の♂では消失する。山地型も県下にはいる。

本種は稀に Gynandromorphism（半雌半雄形）というものが得られる。兵庫県からは得ていないが、近くでは大阪府箕面（宝塚昆虫館報，I，p.3，1940），京都比良山（青木，新昆虫，V，11，p.44，1952）から記録されている。

** 産地は出来るだけ詳しく記し、配列は東より西へ、南から北へと産地の次に〔 〕をもって示せるは筆者の見得た文献の記録で筆者自身の採集したもの及びご恵与により現在筆者の所有標本のものは産地の次に（ ）をもって記した。

本種の幼虫の記載は県下篠山産のものでされている(林, 奥谷, ニューエントモロジスト, V, 4, pp.7~9, 1956)

産地: 川辺郡笹部(1♂, 21-VII-1958, 塚口), 神戸市一御影〔関, 1933〕, 六甲山(1♂, 15-VII-1956), 摩耶山(1♀, 21-VII-1955), 鳥原(1♂, VII-1937, 2♂♂, VII-1939, 1♂, 29-VII-1957), 布引(1♂, 20-VII-1952), 山の街(2♂, 4-VII-1954, 4♂♂, 1♀, 19-VII-1959), 大池(1♂, 13-VIII-1940), 藍那(2♂♂, 5-VII-1959), 宝塚市武田尾(1♀, 25-VII-1954) 氷上郡〔山本, 1958〕, 養父郡氷の山(3♂♂, 1♀, 27-VII-1956)

分布: 日本(北海道, 本州, 四国, 九州)

“クワガタムシの方言”

一般にクワガタムシのことを京阪神地方では“ゲンジ”と言っているが、県下郡部での呼称は異ったものがあるようで、またクワガタムシ科に属する各種についてのそれぞれの呼称もあるような種もあるが、神戸地区ではそれ程くわしくわけて称していないと考えられる。神戸の祇園神社の夏祭(毎年7月13日より1週間)には、夜店に出ている。このクワガタムシ科のものの方言に就いて調べられた故高島春雄氏の報文(1933)があり、その中には兵庫県でのものも含まれているのでそれを此処で紹介しておく。

汎称の方言としてクワガタムシ科のものを“ゲンヂ”と言っているのは愛知県小牧町、同犬山町、京都市一♂はゲンジ、♀をヘイケ、大阪府三島郡その他京阪地方、神戸市、和歌山市、徳島市外等相当多く知られている。また“ヘイケ”と称するものに兵庫県西宮地方、同多可郡がある。各種についてはノコギリクワガタ〜ウシ(丹波篠山)、しかしながらカブトムシをボーズと称する(西宮市、多可郡)のは神戸でも同じと思うがカブトムシの♀をヘイケ、クワガタムシの♂をゲンジ(神戸市)と称せられていることに就いてはヘイケとカブトムシの♀を必ずしも言っていないように思う。

筆者の知れる範囲の呼称はその他にミヤマクワガタの♀を“タイコ”、ノコギリクワガタ♂を“カジワラ”、ヒラタクワガタを“べべ”等がある。

Genus *Prismognathus* Motschulsky

オニクワガタ属

本属は日本から1種のみしか知られていない。

3. *Prismognathus angularis* Waterhouse

オニクワガタ

Ptismognathus angularis Waterhouse, Ent. Monthl. Mag. XI, p.6 (1874)

黒色乃至黒褐色、♂の大腿は頭部とはほぼ等長、末端は同一に2分しその基方から中央部にかけて5、6個の小

歯を装い、基底内縁は歯状に突出する、頭部は全面点刻を粗布し、前頭の前縁は弧状を呈しその両側には各1個の低い瘤状突起を装い、中央部は深い凹陷を有する。頭楯は甚だ細小、前胸背は頭部と同様に小点刻を粗布し中央には不明瞭な浅い縦溝がある。小楯板の中央にも細くて不明瞭な縦溝を具え末端は赤褐色を呈する、上翅の末端も赤褐色を呈する。上翅は小点刻及び極めて不判然な縦溝を装い、側方には小顆粒を密布する。脚は赤褐色を呈する。♀は大股が短小。

体長(大腿を除く)15~20mm内外。

北海道以外には高地帯にのみ産する種で兵庫県下から氷の山の記録を知るのみである。幼虫の記載は林氏のものがある。(ニューエントモロジスト, IX, 1/2, pp.32~34, p1.1. 1960)

産地: 養父郡氷の山(1♂, 1♀, 16-VIII, 1955, 高橋, 1959)

分布: 日本(北海道, 本州, 四国, 九州, 屋久島)

Genus *Prosopocoilus* Hope et Westwood

ノコギリクワガタ属

Subgenus *Metopodontus* Hope et Westwood

日本産本属には2種3亜種が知られているが本州産は1種のみである、他の1種2亜種はトカラ、奄美大島、沖縄産で1亜種は八丈島産である。

4. *Prosopocoilus* (*Metopodontus*) *inclinatus*

(Motschulsky)

ノコギリクワガタ

Psalidoremus inclinatus Mots., Etud. Ent.

VI, p.29, f.11 (1857)

Psalidoremus mandibularis Thoms., Ann. Soc. Ent. Fr., (4) II, p.417 (1862)

var. *inflexus* Harold, Abh. Naturw. Ver. Bremen, IV, p.288 (1875)

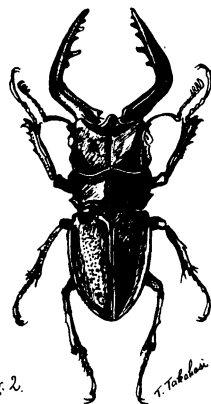


Fig. 2.

Prosopocoilus inclinatus (Motschulsky)

黒褐乃至赤褐色でやや光沢がある。♂の大股の形は変異が甚しいが普通は頭部、胸部を合せたよりも長く、基

部において急に下方に彎曲し、中央部最も巾広くそこに最大歯を具えその後方に1個、その前方に3、4個の小歯を有し末端内方には縦隆を有する。

頭部は全面小顆粒を密布し前頭は甚しく凹陷し、頭楯は狭く前方に突出する、上唇は長く先端細まる、前胸背は通常頭部より短い、小顆粒を密布する、上翅は点刻を密布する。脚も黒褐乃至赤褐、腿節両端は濃色。

♀は大腮短小、頭は小さく点刻をやや密に装う、前胸背は後縁角から前方へ軽く弧をなして狭まり、点刻され、側部では点刻は粗大で密、上翅点刻を密布する。

体長(大腮を除く) 25~45mm

クスギ、ニレ、ヤナギ等に來るのであるが、時に落葉下にかくれているものもあり燈火に來ることもある。

県下に広く分布しているが個体数はそう多くない。大腮の歯の小形のもの var. *inflexus* Harold と言われている。

産地； 神戸—御影〔関, 1933〕, 摩耶山〔増田, 橋本, 1938〕, 六甲山(1♂, 15—VII—1956), 鳥原(1♂, 3—VII—1933, 1♂, 25—VII—1936, 1♂, VII—1939, 2♀♀, VII—1955, 1♂, 12—VII—1956), 山の街(1♂, VII—1955, 2♂♂, 27—VII—1957), 五社(1♀, 8—VII—1959), 水上郡〔山本, 1958〕, 津名郡志筑〔5—VII—1950, 堀田, 1959〕, 養父郡氷の山(1♂, 25—VII—1955, 2♂♂, 27—VII—1956)

分布； 日本(北海道、本州, 四国, 九州, 対馬, 屋久島), 韓国。

Genus *Macrodorcus* Motschulsky コクワガタ属

日本産は2種知られており2種共県下に産する。

兵庫県産 *Macrodorcus* 属の種の検索表

- 1 ♂大腮の内歯は大形のもの中央より前に短形を呈し、小形のもの基部に近づかない、小形のもの上翅に条溝明瞭、♀上翅に条溝明瞭……………
…………… *binervis* (Motschulsky)
- ♂大腮の内歯は単純で矩形にならず小形のもの基部に近づき、♂♀共上翅条溝明瞭ならず……………
…………… *rectus* (Motschulsky)

5. *Macrodorcus binervis* (Motschulsky)

スジクワガタ

Dorcus binervis Mots., *Etud. Ent.* p.16, ♀ (1860)

Macrodorcus striatipennis Mots., 1. C., p.17 (1861)

M. cribellatus Mots., 1. C., p.17, ♂ (1861)

M. opacus Waterhouse, *Entom. Monthly Mag.* VI, p.208 (1870)

M. vanvolxemi Lewis, *Ann. Mag. Nat. Hist.* (5) II, p.462 (1875)

Dorcus niponensis Vollenhoven, *Tijdschr.*

Ent., IV, p.113, pl.7, f.3 (1867)

黒色乃至帯褐黒色、大きな個体ではやや光沢を有する。

♂の大腮は大形のものでも前胸背と頭を合せたものより短い、大形のは1個の大形の歯を中央より前に矩形を有し、これを *f. niponensis* Vollenhoven と呼び、小形のは中央より前方に1歯を有するが基部に近づかない。

上唇は明らかな3つの山形をなし両外縁は前方に狭まる。頭部前縁角は鈍角、前胸背より短く小顆粒を密布する。

小楯板は僅少のやや強い点刻を有する、上翅は大形のは条溝全く欠くが、小形のは明瞭な条溝を有する、大形のは小点刻をやや粗に有し、どちらかといえば滑らかに見える。腹面は光沢を有し、小点刻を密布する。

♀は大腮短く上翅条溝明瞭なり。

体長(大腮を除く) 12~22mm

コクワガタに似るが小形であり、大形の個体は非常にまぎらわしいが大腮内歯の形状並びに小形のは明瞭に上翅に条溝を有することにより区別出来る。個体数は少ない。

産地； 神戸裏山〔関, 1934〕, 六甲山(1♀, 29—VIII—1951, 1♂, 10—VII—1955), 川西市一の鳥居(1♂, 22—VI—1952, 1♂, 17—VI—1953), 水上郡〔山本, 1958〕, 洲本市先山〔8—VIII—1951, 堀田, 1959〕, 養父郡氷の山(1♀, 25—VII—1955, 1♂, 27—VII—1958)

分布； 日本(北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬), 韓国。

6. *Macrodorcus rectus* (Motschulsky)

コクワガタ

Psalidostomus rectus Motschulsky, *Etud. Ent.* VI, p.29, ♂ (1857)

Macrodorcus rugipennis Mots., 1. C., p.16, ♀ (1861)

M. diabolicus Thomson, *Ann. Soc. Ent. Fr.* (4), II, p.243 (1862)

黒色乃至黒黄褐色、やや扁平、♂の大腮は頭と前胸背を合せたより長いものから短いものに至るまで色々ある、その中央乃至それより少し前方に大形の歯を有す、この歯は単純で矩形にならない、小形のは基部に接近している。上唇は長方形、前縁角はほぼ直角、前縁中央はやや突起する。

頭部は前胸背より短く小顆粒を密布する、小楯板はやや強い点刻を僅に有する。

上翅は長楕円形の点刻を密布する、腹面は光沢を有

し小点刻を疎布し、後胸腹板側部は鮫肌状を呈する。

♀は大腮短く頭は小、粗大点刻を密布し前方に4個の低い小隆起を並置する、前胸背中央は細点刻を疎に、両側では粗大点刻を密に装う。

体長（大腮を除く）19~33mm

クスギ、ナラ等の樹液に集まり県下では普通に産する。

産地：神戸裏山〔関，1934〕，御影〔関，1933〕，二十渉（1♀，26—VI—1955），鳥原（1♂，1♀，17—VI—1938，2♀♀，10—VII—1938，1♀，23—VIII—1939），山の街（1♂，30—V—1954，1♂，1♀，4—VII—1954，1♀，23—IX—1954，1♂，29—VII—1957，2♂♂，19—VII—1959），大池（1♀，22—VIII—1938），川西市一の鳥居（1♂，22—VI—1952，2♀♀，17—VI—1953），氷上郡〔山本，1958〕，宍粟郡音水（1♀，20—VII—1959），養父郡氷の山（2♀♀，2—VIII—1953，3♀♀，25—VII—1953，1♀，12—VII—1955，1♀，25—VII—1955，1♀，27—VII—1957）

分布：日本（北海道，本州，四国，九州，屋久島），韓国。

Genus *Nipponodorcus* Nomura et Kurosawa

アカアシクワガタ属

本属は *N. rubrofemoratus* (Vollenhoven) アカアシクワガタをタイプとして野村・黒沢両氏により *Macrodorcus* 属から別れて新属とされたもので(1960)上記アカアシクワガタ以外に *Macrodorcus montivagus* Lewis (Japan), *Heinisodorcus arrowi* Boileau (Burma), *Macrodorcus yamadai* Miwa (Formosa), *Eurytrachelus haitschunus* Didier et Seguy (China & Korea) もそれぞれ本属に入る。

属の特徴：眼の前半分は眼縁突起によって別れている、前背板側縁は多少基面前において彎曲する。前脛節の末端分枝は2つで大変短く尖っており一般に基部において小歯を有するが稀に共に欠く。

兵庫県産 *Nipponodorcus* 属の種の検索表

- 1 ♀共脛節と後胸腹板は鮮かな赤褐色を呈す……
…………… *rubrofemoratus* (Vollenhoven)
 - ♀共脛節と後胸腹板赤褐色をせず……………
…………… *montivagus* (Lewis)
7. *Nipponodorcus rubrofemoratus* (Vollenhoven)

アカアシクワガタ

Eurytrachelus rubrofemoratus Vollenhoven, Tijdschr. Ent. VIII, p.152, pl.2, f.1, 2 (1865)
黒色、全体に褐色をおびた光沢がある、脛節と後胸腹板は鮮かな赤褐色。

♂、大腮は頭と前胸背を合せたよりやや短いものから頭部とほぼ等長の短いものまでであり、その末端に3~4

個の小歯を有する。上唇著しく巾広い四角形、頭部は長さが巾より遙かに短く、前胸背と共に微細な顆粒を密布する。前胸背は頭部とほぼ等長、外縁は少しく弧状を呈し、前縁の両側は彎入して全体波状を呈す、後縁は中央やや垂直であるが側縁にかけて弓状に曲っている。上翅は翅底と外縁前方に浅い点刻を具え全面に微細な縮刻を有し、細顆粒を装う。

♀、頭に相癒合する細点刻を装い両眼間に1対の瘤起を並置する、前胸背は外縁のみ粗大点刻を具え中央背面は疎に細点刻を有する。上翅は背面中央を除き密に点刻され外縁部では点刻は粗大で相癒合する。

体長（大腮を除く）25mm前後

県下では中央部より北部にかけて広く分布しているが南部海岸沿いにはほとんどいない、氷の山山麓のヤナギに早朝多く群がっている。

産地：宍粟郡音水，養父郡氷の山（1♂，27—VII—1954，31♂♂，14♀♀，25—VII—1955，12♂♂，9♀♀，27—VII—1957）

分布：日本（北海道，本州，四国，九州），韓国，台湾。

8. *Nipponodorcus montivagus* (Lewis)

ヒメオオクワガタ

Macrodorcus motivagus Lewis, Trans. Ent. Soc. London, p.337, pl. XIV, f. 2, ♂ (1883)

黒色やや艶を欠く、♂の大腮は頭部より長いが前胸背とはほぼ同長、先端近くに上向せる鋭い長い突起を有す。基部近くに鈍く角なす突起を有する。上唇は著しく短く、巾広く、長さの約6倍、前縁は凹弧状、背面は前胸背と共に微細な顆粒を密布し鮫肌状を呈する。

前胸背は巾広い矩形、後縁中央はやや真直ぐ後縁より側縁に至る間は僅かに曲っている、切点は明瞭な歯状突起を有する。

小楯板は半円形、小点刻を散布する。

上翅には全く条線を有せず微細な点刻を存するが艶やかに見える、腹面も黒色、各脚跗節には黄褐色の軟毛を有する。

♀、頭部中央に2突起を有し、頭部の前面並びに中央後方を残し極めて明瞭な円形の刻印を有し前胸背一面に細い点刻を有する、上翅にも細い点刻を有している。

体長（大腮を除く）30.5mm

県下では氷の山、扇の山にのみ産することが知られている種類である、もっとも扇の山においては可成り産する、従来ヒメクワガタの和名でクワガタを間違えて記録されているので注意しなくてはならない。

産地：養父郡氷の山（1♀，12—VII—1954），美方郡扇の山（1♂，1♀，28—VII—1959），温泉町畑ヶ平高原〔10♂♂，3♀♀，1958~1960，奥谷〕

分布；日本（北海道，本州，四国，九州）

Genus *Dorcus* Mac Leay オオクワガタ属

日本産は2亜属，3種が知られている，Arrow (1950)によると *Psalidoremus*，*Prismognathus*，*Macro-dorcus*，*Eurytrachellelus* の属を全部 *Dorcus* 属1属として取扱っておられる。

兵庫県産 *Dorcus* 属の種の検索表

- 1 体扁平ならず，♂大腿中央よりやや先端に近く斜上方に鋭く長い突起を有し，前胸背後縁角に歯状突起を有する，♂♀共小形個体は上翅に条溝明瞭…………… *curvidens hopei* (Saunders)
- 体扁平，♂大腿内側に基部近くやや大きな歯状突起を有しこれより先端前にかけて不整な小歯を列生するが上内方に突起することなし，上翅条溝♂♀共明瞭ならず…………… *titanus pilifer* (Vollenhoven)

Subgenus *Dorcus* s. str.

- 9. *Dorcus* (s. str.) *curvidens hopei* (Saunders)

オオクワガタ

Lucanus curvidens Hope, Trans. Linn. Soc. London, p.589 (1841)

Platyprosopus hopei Saunders, Trans. Ent. Soc. London, (1), III, P.50 (1854)

Platyprosopus striatopunctatus Saunders, I. C., p.51, t. 4, f.5, ♂ (1854)

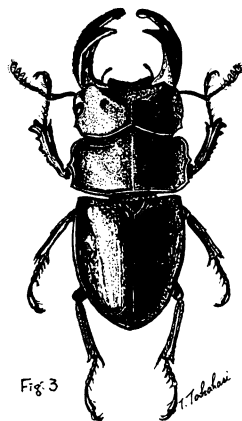


Fig. 3

Dorcus curvidens hopei (Saunders)

♂の大腿は大形の個体では頭と前胸を合せたとほぼ等長で中央よりやや先端に近く斜上内方に鋭く長い突起を有し，先端前の内側にも1鈍歯を具える。頭は大きく前胸とほぼ等長で等巾，大腿基部上方に鈍く角をなす横の突起がある。上唇は著しく短く，巾広く長さの約6倍，前縁は凹弧状，背面は前胸背と共に微細な顆粒を密布し鮫肌状を呈する。

前胸背は巾広い矩形，前縁は2彎状，後縁中央はほぼ

直線状，外縁中央に歯状突起があり前端後方は円く膨出する。

小楯板はやや心臟形，小点刻を散布する。

上翅は底部及び外縁に粗大な点刻を有し背面部は微細な縮刻で光沢を欠く。

小形個体では上翅に明らかな点刻を伴った条溝を有する。

体長（大腿を除く）35~60mm

本種も県下での珍種で戦前筆者は鳥原貯水池の奥で得た経験を有するが，現在では神戸市近郊にはいないと考えられる，大体県下中央部から北部にかけて産し個体数は極めて少ない。

産地；神戸市鳥原（1♂，1♀，21—VII—1938），川辺郡笹部（1♀，21—VII—1959，塚口茂彦，3♂♂，9—VIII—1961），氷上郡春日部〔1♂，VIII—1949，高橋匡〕，同春日町黒井〔1♀，VI—1950，高橋匡〕，多紀郡篠山町〔2♂♂，21—XII—1957，鈴木，1958〕

分布；日本（北海道，本州，四国，九州），韓国，支那，台湾。

Subgenus *Serrogathus* Motschulsky

- 10. *Dorcus* (*Serrogathus*) *titanus pilifer*

(Vollenhoven)

ヒラタクワガタ

Platyprosopus platymelus Saunders, Trans.

Ent. Soc. London, (1), p.50, f.7, t.3 (1854)

Serrogathus castanicolor Motschulsky, Etud. Ent., X, p.12, ♂, (1861)

Eurytrachellelus consentaneus Albers, Deut. Ent. Zeit., XXX, p.28 (1886)

Eurytrachelus titanus Boisduval, Voy. de l'Astrolabe, p.327, t.6, f.19 (1832)

黒色で扁平，♂の大腿は頭と前胸背を合せたとほぼ同長のものから前胸背とほぼ同長のものまであり太く扁平，内側には基部に近くやや大きな歯状突起があり，これより先端前にかけて不整な小歯を列生し，先端直前に1鈍歯がある。頭は大きくほぼ平坦で前胸背とほぼ同長か短く少しく巾狭く共に小顆粒を密布し光沢鈍い。上唇は前縁が中央で深く角をなし彎入する。前胸背は巾広く外縁中央前に1鈍歯を具える。

小楯板は円味を帯び巾広い，三角形，基半は点刻される。

上翅は全面に小点刻をやや密に具え微細な縮刻を装い，特に外方では光沢が鈍い。

上翅基部はやや粗大な点刻を具え，背面には縦溝の痕跡があるが肩部付近のもの他認め難い，前脛節外側は鋸状を呈する。小形の♂の背面光沢があり，頭，前胸背側部は粗大点刻を具え，前胸背中央は小点刻を散布し上翅の点刻は強くやや列状，大腿は基部近くの大歯を存す

るのみである。

体長（大腮を除く）22~45mm

本種は従来 *Eurytrachelelus platymelus* Saunders の学名で知られていたが、現在では *Dorcus titanus* Boisduval として取扱われている。分布範囲はフィリッピン、セレベス、ボルネオ、スマトラ、インド、マレー半島、ビルマ、アッサム、ダージリン、支那、韓国、ラオス、トンキン、アンナン、日本、シルヘット、ヒマラヤでどちらかと言えば南方系の種である。

R. Didier & E. Ségury (1953) によると各産地で次の如く変種が記録されている。

var. *elegans* Boileau, 琉球

var. *fafner* Kriesche, トンキン

var. *fasolt* Kriesche, 韓国

var. *hangul* Kriesche, タイ

var. *hymir* Kriesche, 支那

var. *sika* Kriesche, 台湾

var. *typhon* Boileau, ルソン, セレベス

var. *typhoniformis* Nangel, 支那, 雲南

日本に産するものは野村氏により次の如く亜種として取扱われている (1960), 即ち

subsp. *pilifer* Vollenhoven, 本州, 伊豆, 四国, 九州

subsp. *castanicolor* Mots., 対馬

subsp. *elegans* Boileau, 奄美大島, トカラ諸島

subsp. *okinawanus* Kriesche, 沖縄本島, 石垣島

これら亜種は交尾器によって区別出来る他次の外部形態によって別けられる。

subsp. *pilifer* Vollenhoven, ♂の大腮はやや狭く、最も大きい内歯は基部の $\frac{1}{4}$ の位置、♂の頭楯は大腮の基部とほぼ同じ巾かまたはやや広い。

subsp. *castanicolor* Mots., ♂の大腮は細長い、大きな内歯は基部の $\frac{1}{3}$ にあり、頭楯より狭い。

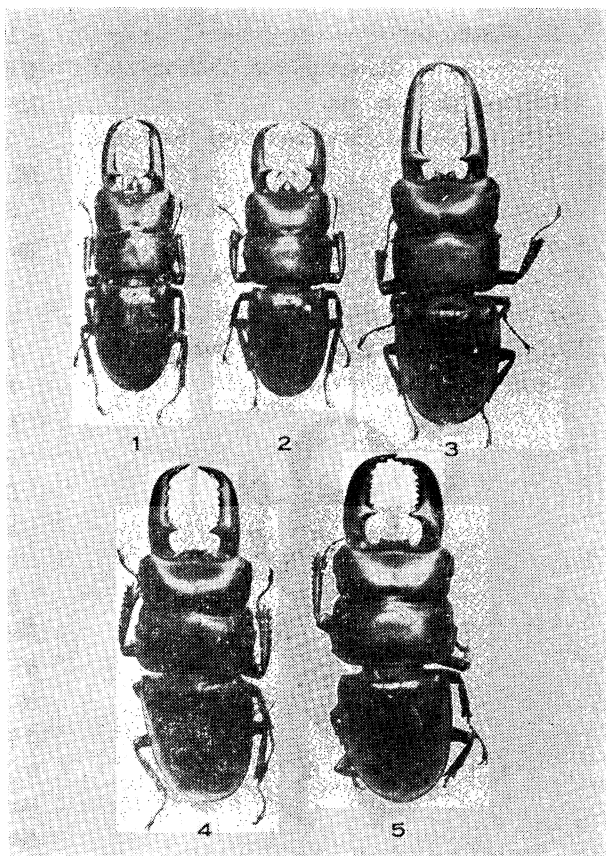
subsp. *elegans* Boileau, ♂の大腮はやや太くより内方に曲がり大きい内歯は基部 $\frac{1}{3}$ 付近、頭楯の巾はやや広い。

subsp. *okinawanus* Kriesche, ♂の大腮はやや太く、その大きな内歯は基部またはそれより中央に近く頭楯もやや巾が広い。

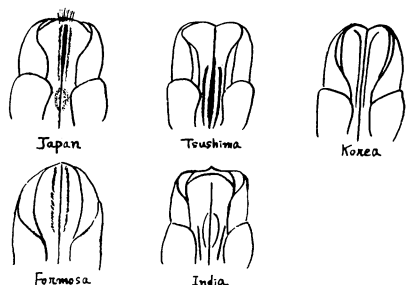
幸い筆者は日本、韓国、対馬、台湾、インド産の標本を有するので、その写真を掲げると共にその変化状態をながめて見たい、交尾器は別にしたが明らかに産地によって異っている。

野村氏は韓国に産しないように取扱っておられるが本種は韓国にも産する (R. Didier & E. Ségury, 1953)、筆者も韓国産の標本は3♂♂, 1♀を有している。ただ北海道での記録はなく青森での記録が一番北の記録のようである (虫の世界, II, 7/18, p.21, 1938), 関東より南に多く産し、中部地方には少ないようである、近畿地方には広く分布しているが個体数はそう多くないのではないだろうか? 兵庫県下でも北部での記録はほとんどなく南半部の地にいる、その他四国、九州にいる。

野村氏によるとスジプトヒラタクワガタという本種の近似の種がヒラタクワガタが北方に分布を拡げる前の暖かい時代に北進して種に進化したものと思われ (この種は奄美大島まで北上し九州、本州には分布を拡げていな



1. *Dorcus titanus castanicolor* Motschulsky, Tsushima, 12—VI—1959
2. *D. t. pilifer* (Vollenhoven), Matsumoto, Nagano Pref. Japan, 3—VI—1959
3. *D. t. fasolt* Kriesche, Korea, 17—VII—1961
4. *D. t. sika* Kriesche, Puli, Formosa, VII—1957
5. *D. titanus* Boisduval, Khasi Hilla, India, VII—1957



い)、その後の暖かい時代に北進してきたのがこのヒラタクワガタであるとされている。

韓国産のものは対馬産のものによく似ている、大腿はより細長い、大きな内歯は基部の4位の所にあり頭楯より狭い、この大腿の細く狭い事は所謂 platymelus と称され Arrow もインド産のものとは異るとされている

(1949)。大腿は南に行くに従って太くなって行く、曲り方も日本、対馬、韓国産はスーツと延びているのに比し、それ以南の地のものは内方に曲って行く度合がハッキリしている、大腿の最も大きい内歯は対馬、韓国産のものは基部に近く、日本産のものから南方に行くに従って上の方に有るようになって行く、台湾、インド産のものはほぼ基部の5位である、それと頭楯の中も南方のものは広がっている。

R. Didier & E. Séguryの図示された(1953, f. 102, p.141), 中国, 雲南産の var. typhoniformis Nagel では頭楯の中も広く大腿の大きな内歯は真中より先端に近い所にある。

産地; 神戸市御影町 [関, 1933], 鳥原 (1♂, 23-IX-1939), 山の街 (1♂, VII-1937, 1♂, 23-IX-1954) 長田 (1♂, 6-VII-1938), 津名町志筑 [20-VI-1950, 堀田, 1959], 水上郡 [山本, 1958]

分布; 日本(本州, 伊豆大島, 四国, 九州)

Genus *Aegus* MacLeay ネフトクワガタ属

11. *Aegus laevicollis subnitidus* Waterhouse

ネフトクワガタ

Aegus laevicollis Saunders, Trans. Ent. Soc. London, (1), III, p.54, pl.4, f.8, ♂ (1854)

Aegus subnitidus Waterhouse, Ent. Monthl. Mag. IX, p.277 (1873)

光沢ある漆黒色でいくらか扁平、頭部はほぼ矩形、微細な顆粒を密布し、光沢を欠き点刻を疎に散布する。

♂の大腿は弧状に彎曲し、円筒形、基部は太くその内縁上下に各1個の大きい鋭歯(下方のものが基部に近い)を具える。



Fig. 4

Aegus laevicollis subnitidus Waterhouse

前胸背は光沢があり、中央部は細点刻を散布し、正中線上に浅い縦の凹みを有し、僅少の強い点刻を有し両側は微細な縮刻を装い、前後両縁の中央部を除いて全縁にも強い点刻を有し、特に外縁部では粗大にして密でその間室はやや縦皺状を呈す。

小楯板は少数の点刻を具え滑沢、上翅も光沢があり粗大に点刻された8条の縦溝を有し、その間室にもやや小さな点刻を有し、上翅外縁部は粗大に点刻される。

♀は大腿短く外縁稜状をなし、頭部は粗大点刻を密に具え、前胸背は中央部でも強い点刻を具える。上翅間室の点刻は粗大。

体長(大腿を含む) 16~21mm

原種は支那産で日本亜種は本州中部以北には稀で関西地方には広く分布している、県下での分布は一般に南部に多く特に能勢電鉄沿線に多い、奄美大島、石垣島、台湾産はそれぞれ別亜種として区別されている。

産地; 川西市一の鳥居 (2♂♂, 1♀, 22-VI-1952-1♂, 12-VI-1952, 1♂, 17-VI-1952), 川辺郡笹部 (3♂♂, 1♀, 21-VII-1959, 塚口), 洲本市先山 [16-VIII-1950, 堀田, 1959], 水上郡 [山本, 1958], 佐用郡瑠璃寺 [1♂, 19-VIII-1954, 奥谷], 多紀郡篠山 [1♂ XI-1952, 奥谷]

分布; 日本(本州, 四国, 九州)

Subfamily Figulinae チビクワガタ亜科

Genus *Figulus* Mac Leay チビクワガタ属

12. *Figulus binodulus* Waterhouse チビクワガタ

Figulus binodulus Waterhouse, Entom.

Monthly Mag., IX, p.277 (1873)

体細長く両側平行、僅かに膨隆する、全体光沢のある漆黒色、頭部は中央少しく凹陷し、前縁は殆んど直線状で各大腿基部は緩く彎入する。頭楯は2鈍歯を具える。

頭部には僅少のやや点刻を有し、両眼は平板状の眼葉によって完全に上下に分たれる、両眼の前方及びその後内方に各1個の低い隆起がある。

大腿短く太く前胸背は長さより巾が少しく広く、頭部よりやや広い、両側平行で中央にある強く点刻された縦

溝と外縁やや内方の若干の強い点刻、外縁の弱い点刻とを除けば平滑で背面には細かい点刻を散布する、前縁中央には前方に向いた1小突起がある。

上翅は胸部と殆んど同巾で9条の縦溝を具え、それらの中で背面の5条は深く外縁の2条は点刻列となる。

体長(大肥共) 13mm内外

サクラヤクヌギ等の皮下や洞穴に見出される種で表面採集は困難である。

産地; 宝塚市 [IV—1953, 中根, 1955], 氷上郡柏原町 (1♂, 1♀, 2—III—1951, 1ex., 10—VII—1949, 5exs., 14—III—1956, 高橋匡), 同郡春日町黒井 (1ex., 3—VII—1950, 高橋匡)

分布; 日本(本州, 八丈島, 四国, 九州)

Subfamily Aesalinae マダラクワガタ亜科

Genus Aesalus Fabricius マダラクワガタ属

13. *Aesalus asiaticus* Lewis マダラクワガタ
Aesalus asiaticus Lewis, Trans. Ent. Soc. London, p.340, pl.14, f.5 (1883)

体楕円形やや膨隆する、全体紫黒色で(乃至黒褐色)光沢がなく粗く点刻され、褐色又は黒褐色の鱗片を装う。頭部は小形で下向き扁円形である。大肥小形、触角末端3節は膨大し球桿状を呈する。

前胸背中央には線状に鱗片又は棘毛のない部分があり、その両側には太い黒色毛からなる2個の毛叢があり、これの前方にも不明瞭な新月形の毛叢がある。

小楯板は三角形、各上翅上には会合線に沿ったものも含めて4条の断続した黒毛叢がある。

体長 4.5~6mm

本種は比較的高地の森林中において倒木、又は枯木の樹皮下にて捕獲される、県下では奥谷氏が氷の山に於いて記録されているのみで珍種である。

本種の生活史に就いては西島浩氏のものがある。

(Nippon no Kochu, III, 1, p.11, 1939)

産地; 養父郡氷の山 [2exs., 17—VI—1958, 中沢啓一, 奥谷, 1960]

分布; 日本(本州, 四国, 九州)

以上兵庫県産クワガタムシ13種を記録したが本州産の種はその大部分を産することとなり僅にツヤハダクワガタを産しないのみで九州もふくめるとマメクワガタを産しないということになる。ツヤハダクワガタは、あるいは産するのではないかと考えられる。

参考文献

- 1933; 関 公一; 御影町付近産の甲虫目録(其の1) 昆虫界, I, 3, pp.251~253.
1934; 関 公一; 大阪・神戸付近産の鍬形虫 昆虫世界, XXXVIII, 437, pp.17~19.
1939; 三輪勇四郎・中条道夫; 日本産鞘翅目分類目録 第5輯, 金龜子虫科
1949; G. J. Arrow; Fauna of British India, Coleoptera, Lamellicornia, Part. IV.
1950; 中根猛彦他; 日本昆虫図鑑(北隆館版)
1952; R. Didier et E. Séguéy; Catalogue Illustré des Lucanides du Globe, Atlas.
1953; R. Didier et E. Séguéy; Catalogue Illustré des Lucanides du Globe
1955; 近畿甲虫同好会編; 原色日本昆虫図鑑, 甲虫篇, 増補改訂版(保育社版)
1958; 山本義丸; 兵庫県氷上郡昆虫目録 Natura 特別号
1959; 林長閑, 福田彰; 日本幼虫図鑑(北隆館版)
1960; S. Nomura; List of the Japanese Scarabaeoidea (Coleoptera) Tōhō Gakuho, No. 10, pp.39~79.
1963; 野村鎮; 原色昆虫大図鑑, II (甲虫篇), (北隆館版) (11—V—1964)

(付記)

本篇脱稿後筆者の不注意で *Dorcus (Serrognathus) titanus pilifer* (Vollenhoven) を野村氏は韓国に産しないように取扱っておられると記したが、氏は韓国産は独立種として *D. (S.) fasolt* (Kriesche) を認めておられる (Tohō Gakuho, No.12, pp.35~37, 1962) のでここにその取扱について付記しておきたい。

氏は *D. (S.) titanus castanicolor* (Motschulsky) に似るが互の交器の相異が顕著である点から別種として認められたものである、筆者の所有する韓国産標本(3♂)の交尾器は、野村氏の図示されたような形態をしておらず、大肥の大きな内歯の位置も *castanicolor* によく似ておりその他の点でも余り大きな相異を認められなかったので独立種として取扱うより亜種として取扱う方が良いように思う、一見した感じでは *castanicolor* より大肥の狭い点で異った印象は受ける。